

西国33所観音霊場 琵琶湖周辺 旅

4月4日



近江八幡駅・北口（8：30発） ジャンボタクシー（9人乗り／助手席・補助1席含む）

⇒ 長命寺 ⇒ 観音正寺 ⇒ 彦根駅 （13：00着） （4時間30分）

JR彦根駅 ⇒ JR長浜駅（荷物預け）

13:18 ⇒ 13:35	17分	240円	🚗 > 米原 > 🚗
12:49 ⇒ 13:10	21分	240円	🚗 > 米原 > 🚗

JR長浜駅 ⇒（徒歩orタクシー） 長浜港 竹生島めぐり
 長浜港 ⇔ 竹生島（往復） 大人 2,830円

竹生島では拝観料（大人400円）が別途必要

長浜港14時10分 ⇒ 竹生島着14時40分
 上陸時間 = 75分

竹生島発 15時55分 ⇒ 長浜港着16時25分

長浜港 ⇒（徒歩orタクシー） JR長浜駅 ⇒ JR大津駅

（タクシー） ⇒ 本日の宿（ホテルピアザびわ湖 2食付き）

16:57 ⇒ 18:02	🕒 1時間5分	🚗 安	1,140円	🚗 乗換 なし	🚗
17:29 ⇒ 18:32	1時間3分	🚗 安	1,140円	🚗 乗換 なし	🚗

ホテルピアザびわ湖



長浜航路 竹生島往復 長浜港 14:10 発

2月23日 電話で7名で予約済み

日時：平成30年4月4日（水）

人数：7名様

車種：ジャンボタクシー（9人乗り／助手席・補助1席含む）

行程：近江八幡駅・北口（8：30発）～長命寺～観音正寺～彦根駅（13：00着）

車代：¥28,300（税込）

※駐車料・通行料・拝観料・入山料は別途必要となります。

※延長の際は30分につき@2,830円（税込）となります。

★行程に昼食時間は含まれておりませんのでご注意ください。★

支払方法：当日現金支払い

※クレジットカードの対応は出来かねますので、現金でのご用意を
よろしくお願いたします。

近江タクシー株式会社 業務部業務課 松井

〒522-0010

滋賀県彦根市駅東町15番1 <http://www.ohmitetudo.co.jp/taxi/>

TEL 0749-24-0106



長命寺（ちょうめいじ）

長命寺は西国三十一番札所の聖徳太子開基の寺で、参詣客も多く、琵琶湖の眺めも美しい寺院です。

八百八段の長い石段を登りつめると、本堂・護摩堂・三重の塔・三仏堂・鐘楼など重要文化財の諸堂が立ち並んでいます。



近江山河抄で白洲正子さんは、近江の中でどこが一番美しいかと聞かれたら、私は長命寺のあたりと答えるであろう。と書かれています。

寺伝によると、長命寺は、景行天皇の御代に、式内宿禰がここに来て、柳の古木に長寿を祈ったのがはじまりである。その後、聖徳太子が諸国巡遊の途上、この山へ立ちより、柳の木に観世音菩薩を感得した。

その時、白髭の老翁が現われて、その霊木で観音の像を彫ることを勧めたので、寺を造って十一面千手観音を祀り、式内宿禰に因んで「長命寺」と名づけた。歴代の天皇の信仰が厚く、近江の佐々木氏の庇護のもとに発展し、西国三十一番の札所として栄えた。

景色がいいのと、名前がよかったことも、繁栄をもたらす原因となったであろう。

■住所 近江八幡市長命寺町157番地

十二代景行天皇の代、武内宿彌（たけのうちのすくね）がこの山に上り、『寿命長遠諸元成就』の文字を柳の大木に彫り、長寿を祈願した結果、三百歳の長寿を保ったと伝えられる。

その後、聖徳太子がこの地を訪れ山に上り、武内宿彌が彫った柳の木を見、感嘆しているとそこに白髪の老人が現れ、『この木で仏像を刻み、寺を建立するように』と告げ立ち去ったという。

太子はこのお告げの通り、この柳の木で千手十一面聖観音三尊一体の像を刻み、推古天皇27年(619年)に本尊として祀り、武内宿彌長寿靈験の因縁で長命寺と名付けたのがこの寺の創始とされている。

当寺は永正13年(1516年)に戦火に遭い、伽藍の殆どは焼失してしまい、現存する建造物は大永年間から慶長年間(1521-1614年)にかけて再建されたものといわれている。



バス停傍の土産物屋の前を通ると、長命寺までの808段の石段がありこれを上ると長命寺に着く。バス停から徒歩約30分。

車で来ると山門の近くまで車道がついており、808段の石段を登る必要はなく、約100段の石段を上るだけでよい。

長命寺の「山門」



「本堂」

現存の「本堂」は大永4年(1524年)に再建されたものといわれている。

本尊、千手十一面聖観世音菩薩三尊。本尊は聖徳太子が刻んだもの、又は、一説には鎌倉時代の作ともいわれおり、何れであるかは明らかではない。

本尊は秘仏であり直接の拝観はできない。

「本堂」は重要文化財に指定されており、本尊、千手十一面聖観世音菩薩三尊一体も重要文化財に指定されている。



「三重塔」

桃山様式の建築で、現存のものは慶長2年(1597年)に建てられたものとされている。

「三重塔」は重要文化財に指定されている。



長命寺はかなりの高所にあるので境内から琵琶湖を見渡すことができる。



「三仏堂」

「三仏堂」は佐々木義秀の菩提を弔うため元暦元年(1184年)に造立したものと伝えられており釈迦、弥陀、薬師の三尊を祀っている。現存の建物は永正13年(1516年)の焼失後、永禄年間に再建されたものといわれている。

「鐘楼」

「鐘楼」の鐘は琵琶湖の龍神が長命寺の観世音に捧げたものである、という伝説がある。

「鐘楼」は重要文化財に指定されている。



写真奥から「三重塔」、「本堂」、「三仏堂」、「護法権現社拝殿」

手前左側にある建物が「拝殿」、写真右上に見えるのが「太郎坊大権現社」である。

ここには長命寺の修行僧で空を飛んだり、風雨を呼ぶ霊力をつけ、後に京都の愛宕山に移り住んだと伝えられている太郎坊を祀っている。愛宕山の太郎坊は神として信仰の対象となる大天狗の名がついている。

「拝殿」と「太郎坊大権現社」の間には石段があり、その途中右側に大きな岩があるが(直上の写真では中央に写っている)、これが今にも落ちそうに見える。この岩は飛来石と呼ばれており、修行を極めた太郎坊が長命寺を懐かしく思い、京都の愛宕山からここまで飛ばしてきたものと伝えられている。





見どころ

観音正寺

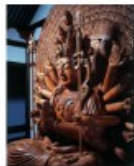
(かんのんしょうじ)

徹山（きぬがさやま）の山頂付近の寺院で西国三十二番札所で聖徳太子が人魚に哀願されて建立したといわれています。

徹山山頂には巨岩があるので、古代にはこの山に対する原始信仰があったと考えられ、寺の創業後には奥院は聖地として崇められた。

日本最大総白壇千手千眼観世音菩薩の香気にして心しずまる寺。

参道は険しいが林道（有料）を中腹まで利用すれば参拝しやすい。



拝観志納金 500円（大人）

内陣拝観料 300円

縁起

聖徳太子が琵琶湖のほとりで人魚に呼び止められた。人魚は『私の前世は漁師で、殺生を重ねてきたので、こんな姿にされてしまい、今では魚たちに苦しめられています。どうか成仏させて下さい』と頼んだという。

聖徳太子はこの願いを聞き入れ、千手観音像を刻み、推古13年(605年)に堂を建立し、観音像を祀ったのが寺の創始とされている。

戦乱の世になり佐々木氏が山上に城を築いたが、巡礼にまじって問者が山上に入ってくるのを嫌って寺を山麓に移転させたといわれている。かつての観音正寺は大寺で盛時には三十三の塔頭を擁したという。

織田信長の兵火によって寺は焼失したが、その後、慶長2年(1597年)に再び山上に上がり教林坊の宗徳法橋が本堂を建立し、諸堂を再興したとされている。



車で参拝すると駐車場から観音正寺へ通じる参道に『観音正寺』と彫られた大きな石柱を見ることができる。この位置から奥へは一般の車は入ることができず、ここからは歩くことになる。



参道を進むと一寸した広場に着く。通常、寺には山門（仁王門）があり、山門をくぐると諸堂伽藍が立ち並ぶが、観音正寺には山門がない。

広場の中程に一对の「仁王像」が置かれているが、この位置は通常、山門のあるべき場所よりかなり奥に入った場所のようである。

仁王像が山門の代わりをなすものかどうかはわからないが、山門の多くは仁王像を安置しており、仁王門とも呼ばれていることから、これはこれで山門を表しているものと考えられないこともない。



参道を進み広場に着いたときに先ず出会う建物は「鐘楼」である。



参道左手に「濡佛（ぬれぶつ）」が安置されている。

「濡佛」は江戸時代から安置されていたようであるが、第二次世界大戦時に供出され、現存のものは以前のままの姿を映し昭和58年(1983年)に再建されたものである。

「濡佛」の胎内には信徒が書写した写経が納められているという。



境内の最も奥に「本堂」が建てられている。中央奥に見えているのが「本堂」、右端に屋根が見えているのが「護摩堂」である。

「本堂」は平成16年(2004年)3月に再建され、同年5月22日に落慶されたもので、見た目にも新しい。

かつての本堂は明治15年(1882年)に彦根城の槻御殿を移したものであったが、平成5年(1993年)5月22日に全焼した。この火災により本堂に安置されていた重要文化財の本尊、木造の秘仏千手千眼観音立像をはじめ平安後期の毘沙門天像など仏像9体も灰燼に帰した。また、聖徳太子に願を訴えたという伝説の人魚のミイラと称するものも同時に焼失したといわれている。



「本堂」の右手山側の斜面には何か曰くありげな石積みが見られる。寺の人に石積みに特別の意味があるのかどうか聞いてみた。結果、『この石積みには特別の意味はありません。本堂の火災で山の土が焼けて崩れやすくなっているので山崩れを防ぐための石積みです』という答えが返ってきた。この答えには一寸ガッカリしたが、それにしても珍しい形の石積みである。

竹生島



竹生島は、長浜市に属する周囲2キロの小さな島です。西国三十三カ所観音めぐりの三十番札所「宝厳寺」や「都須夫麻神社」のある島として、古来より人々の厚い信仰を集めてきました。

戦国時代には数々の武将から信仰も集め、島には安土桃山時代の国宝や重要文化財も数多く残されています。

また最近では、大河ドラマや映画の舞台になっている他、パワースポットとしても人気を集めており、ご参拝の方々だけでなく、観光目的の方々も多くお越しになっています。

船着き場から見た宝厳寺の各堂宇は山腹に密着するような形で建てられており、数軒ある土産物屋の前を通り抜け、拝観受付を通ると眼前に急勾配の石段がある。この石段は「本堂」前の広場まで165段ある。

竹生島には送電線が引かれていないので、電気は自家発電に頼っている。そのためか、自動販売機は置かれていない。飲みものは船着き場にある土産物店で買うことができるが高価である。また、弁当類は売られていない。



竹生島宝厳寺は、神亀元年（724年）聖武天皇が、夢枕に立った天照皇大神より「江州の湖中に小島がある。その島は弁才天の聖地であるから、寺院を建立せよ。すれば、国家泰平、五穀豊穰、万民豊樂となるであろう」というお告げを受け、僧行基を勅使としてつかわし、堂塔を開基させたのが始まりです。

行基は、早速弁才天像（当山では大弁才天と呼ぶ）を彫刻し、ご本尊として本堂に安置。翌年には、観音堂を建立し、千手観音像を安置しました。

それ以来、天皇の行幸が続き、また伝教大師、弘法大師なども来島、修業されたと伝えられています。

当山は、豊臣秀吉との関係も強く、多くの書状、多くの宝物が寄贈されています。慶長七年（1602年）には、太閤の遺命により、秀頼が豊国廟より桃山時代の代表的遺稿である観音堂や唐門などを移築させています。

明治時代、この島は大きく変化し、当山より都久夫須麻神社（竹生島神社）が分かれました。

古来、現在の神社本殿を当山は本堂とし、本尊大弁才天を安置しておりましたが、明治元年（1868年）に発布された『神仏分離令』により大津県庁より、当山を廃寺とし神社に改めよという命令が下りました。

しかしながら、全国数多くのご信者皆様の強い要望により廃寺は免れ、本堂の建物のみを神社に引き渡すこととなりました。

本堂のないままに仮安置の大弁才天でしたが、昭和17年、現在の本堂が再建されました。

本尊大弁才天は、日本三弁才天の一つとして、観世音菩薩は西国三十三ヶ所観音霊場の第三十番札所として参拝の方々の姿が絶えず、その詠歌の音が響いています。

古くは平経正が琵琶をひいて戦勝を祈願し、謡曲『竹生島』など数多くの音曲にも、この島の美しさがたたえられています。

いまなお、神秘とロマンがいっぱいに秘められています。



「国宝」唐門

『唐門』とは、唐破風をもつ門という意味です。

この『唐門』は、秀吉を祀った京都東山の豊国廟に建っていた『極楽門』を豊臣秀頼の命により片桐且元を普請奉行として移築されたものです。移築の際、土地の条件から観音堂に接して建てられています。桧皮葺、建物全体を総黒漆塗りとした上に金鍍金の飾金具が散りばめられ、虹梁中央の臺股の周囲には鳳凰や松・兎・牡丹の彫刻を、二枚の大きな棧唐戸や壁には牡丹唐草の彫刻を極彩色塗りとして飾っています。豪華絢爛と言われた桃山様式の『唐門』の代表的遺構です。



平成18年、オーストリアにあるエッゲンベルグ城にて

『大坂城図屏風』が発見されました。その絵中には『極楽門』の前身であったと伝えられている大坂城の本丸北方に架けられていた『極楽橋』の姿が描かれており、その絵図から判断して、『唐門』は秀吉が建てた幻の大坂城の唯一の遺構であるのは間違いないのではと昨今注目を集めています。





本堂（弁才天堂）

本尊の大弁財天は、江ノ島・宮島と並ぶ「日本三弁財天」の一つで、その中で最も古い弁財天です。

そのため、当山のみ「大」の字をつけ、大弁財天と称します。

この本尊は、開山時（七二四年）聖武天皇の勅命を受け、僧行基が開眼したものです。内陣の壁画は、荒井寛方画伯によるもので正面の壁画を「諸天神の図」、側面を「飛天の図」と呼びます。



壁画 飛天の図



弁才天（御前立像）

弁財天は七福神の一人として民衆の信仰を集めてきました。人の穢れを払い「富貴・名譽・福寿」「愛嬌縁結びの徳」「子孫」を恵む神です。また「音楽・智恵・財物」の神として吉祥天とともに広く信仰された女神です。

弁財天はもともとインド古代信仰の水を司る神「サラスヴァティー神」です。

インドでは「水」には汚れを洗い流す力があるというところから、人々の清き心（菩提心）を守る神として信仰を集め、修行者の守り神として祭られるようになりました。修行を助けるからこそ、芸道、商堂の守り神になったと言われています。

写真は前立の弁財天です。（秘仏のご本尊は60年に一回開帳、次回の開帳は西暦2037年となります）

※この写真はご分身です。ご本尊弁財天は秘仏につき写真掲載できません。

本堂前の広場の南側片隅にかなり風化を受けた「石造五重塔」がある。その高さは約2.5mで鎌倉時代の作であるといわれている。

この「石造五重塔」は重要文化財に指定されている。



本堂前広場の南隅にある石畳の道、次いで石段を下りると石段の途中から眼下に「唐門」とその奥に密接して建てられている「観音堂」が見える。

唐門、観音堂共に慶長7年(1602年)に京都東山の豊国廟から移築したものとされ、唐門は豊国神社の唐門又は極楽門だったものといわれている。何れも桃山時代の代表的な建築物とされている。「重文」観音堂

唐門に続いて千手観世音菩薩を納めたお御堂があります。西国三十三所の第三十番の札所で、重要文化財に指定されています。

このお堂は傾城地に建てられた掛造りで、皆様がお参りされておられる仏間は2階にあたります。天井裏にも昔の絵天井の名残が見て取れると思います。



船廊下

千手観世音菩薩を納めた観音堂から都久夫須麻神社に続く渡廊・舟廊下。

舟廊下は朝鮮出兵のおりに秀吉公のご座船として作られた日本丸の船檣（ふなやぐら）を利用して作られたところから、その名がついています。

これも唐門、お御堂と同時期に桃山様式で作られたものです。



「観音堂」は山の斜面に建っており、舞台造りとなっているが、この「舟廊下」も「観音堂」と同様、崖に寄りかかるような形で舞台造りになっている。

この廊下は「宝厳寺」と「都久夫須麻（つくぶすま）神社」の連結場所になっており、神社と寺の間の境界線が明確ではないが、廊下は寺の領域になっているようである。

「舟廊下」は重要文化財に指定されている。

「舟廊下」を渡ると「都久夫須麻（つくぶすま）神社」の本殿横に出る。



都久夫須麻（つくぶすま）神社 本殿
かつては「宝厳寺」と「都久夫須磨神社」は一体であり、弁才天像も神社本殿に祀られていたといわれているが、明治の神仏分離により両者は分離された。

「都久夫須麻神社」は慶長7年(1602年)に京都から移した建物を中心として建造されたものが現在の本殿といわれている。

「都久夫須麻神社本殿」は国宝に指定されている。

